

片側の未来

目次

歩き出す未来	291
手探りの未来	259
約束の未来	239
空白の未来	185
片側の未来	5

片側の未来

報われない恋、というものがある。

次第にかすんでいく風景の中、ただぼんやりとそんなことを考えていた。

「君の気持ちには、応えられないから。——ごめん」

大好きな人の唇から、不思議な言葉がこぼれてくる。自分に向けられているということは、はっきりとわかっているのに、まるで他人事みたいだ。黒のアタッシューケースを^{かか}抱え直す長い指。その先に縦長の爪が綺麗に並んでいる。

「……永峰さん」

かすれる声をどうにか吐き出すと、そのまま視線を^{あしもと}足下に落としていた。音もなくきびすを返して立ち去っていくブラウンのシューズ。それを見るのが辛くて目を閉じたのに、今度はだんだん遠ざかっていく靴音が耳元に大きく響いてくる。諦められない想いが、何かに思いきり引っ張られた気がした。それが一瞬、ピンと痛いくらい張りつめてから、ぱちんと音を立てて弾ける。

——もう、泣いてもいいだろう。

私の合図を待っていたかのように、両目からどつと涙が溢れてきた。それは「やっぱり」という気持ちと、「どうして」という気持ちのせめぎ合い。同じような経験を懲りることなく何度も繰り返してる。もういい加減慣れるよって感じだけど。駄目だな、私。かろうじて両手で数えられる回数^の玉砕の現場に、今日再び立ち尽くす。二十一歳、冬のはじめ。やけに冷たい涙が頬を伝っていくなと思ってたら、いつの間にか雨が降り出していた。ここでロマンチックに雪が舞い降りてこないところが私らしい。このまま、風邪を引いて肺炎でもこじらせてしまえばいいな。そうしたら、あの人も少しは責任を感じてくれるだろうか。

頭に肩に次々と雨粒が打ち込んでくる。せっかく新調したニットスーツが濡れちゃうな。今日のためにと、ボータス一括払いでわざわざ購入したんだっけ。そう思いつつ、歩き出した。さざめく雑踏の中、どうやってアパートまで戻ったのかも覚えていない。

目覚まし時計が鳴っている。布団から腕だけ出して、手探りで止めた。嫌だなあ、もう朝？ やっぱりって感じで、熱もなければ悪寒もしない。どうして私、こんなに頑丈^{まぶた}にできてるの。もうちょっとしおらしくできればいいのに。

瞼を開けないまま、心の中で舌打ちする。こんな日は思いきって年休を使っちゃって

もいいのかな。だけど、どこも具合が悪くないのに休むのはやっぱり気が引ける。それに今日から先輩がひとり休みを取っているんだっけ。そうなると頭数もギリギリ。

難航する就職活動をぐぐり抜け、縁あって採用された会社。配属されたのは本社ビルを入ってすぐの案内カウンター、いわゆる「受付嬢」ってことね。

華やかな職場だと思われがちだけど、実はそうでもないの。真夏は自動ドアが開くたびに熱風が真正面から吹き込んでくるし、これからの季節は最新冷蔵庫も顔負けの「瞬間冷凍」状態よ。どちらにせよ、過酷な状況でお肌に悪いことこの上ない。

大体、昨日はどうしたんだっけな。よく覚えてないけれど、クレンジングでメイクを落としたりしないでそのままベッドに潜ってしまったに違いない。あんな状態では何にもしたくなかったし、食欲もなかった。大丈夫かなあ、ファンデーションが浮いちゃったら悲惨だわ。そんなことをうだうだ考えつつ、ぐるんと寝返りを打つ。

——がん！

「……えっ？」

何だか変だなと気づいて、慌てて眼まなこを開いた。目の前には見慣れない花柄の壁紙。そこに思いきり鼻のてっぺんをぶつけてしまった。良かった、鼻血は出ていないみたい。でも場所が場所だけに、あとから赤く腫れ上がったりしたら嫌だな。

——むにゅっ！

「えええっ?」

今度の今度はさすがに飛び起きていた。だって、投げ出した左腕が何かに当たったのよ。それも、すごく柔らかいものに……

ちゅんちゅん。晴れ渡った窓の外、さえずる雀の声。マンガやドラマでお決まりの朝の風景だ。でも、そんなことはこの際関係ない。

まず、気づいたこと。布団のカバーが昨日までと違う。ううん、それだけじゃない。部屋の配置が、というか、部屋そのものが違っていた。昨夜まではベッドの右側に下りるように、左側を壁に寄せていたはずなのに、それが逆になっていて。さらに隣には同じ大きさのシングルベッドが、人ひとりが通れる程度の空間を挟んで向こうの壁際に置かれている。

窓の位置もカーテンの柄もすべて変えられていて、一人暮らしの私の部屋が全然違う場所になっていた。広さは同じくらいなんだろうけど、何だか、というか全く別の部屋だ。そうはいっても、インテリア的には決して嫌いじゃない感じだけだ。

そして、身につけているパジャマはシンプルなパステルグリーンのストライプ。確かにこれも私の好みの形と柄のものなのね。でもこんなのは持っていなかったはず。

さーっと血の気が引いて、その直後に背中を冷たいものが流れていく。どういうことなの、私ってば。まさか振られたショックであらぬ事をしでかしてしまったんじゃない

でしようね？ ああ、記憶がない、全くもって全然記憶がない！

頭を前後左右にぶんぶん振ってみたところで何か思い出せるはずもなく、そんな私の耳に追い打ちをかけるように聞こえてきた声。

「……うう、いたいよお〜ママ……」

ハツとして、先ほどのむにゅ、の方を見た。そういえば、最初に驚いたのはあの違和感だったんだっけ。その後の衝撃が大きくて、すっかり忘れていた。

そうしているうちに盛り上がっていた布団がもぞもぞ動いて、やがて小さな女の子が顔を出す。寝起きの髪があっちこっち向いてるくせつ毛で、小さい手は目をごしごしこすっている。一連の動作を終えたあと、彼女はこちらに向き直ってむくれ顔で言った。

「なかのおかお、ばんってやったらいたいでしょ。ごめんなさいしてっ！」

くるくるの丸い目、ビー玉みたい。ああ、そうか。この子って、子猫に似てる。それにしても可愛い子だな、ちびっ子モデルになれそうなレベルだよ。

「……あ、ええと。ご、ごめんなさい……」

あまりに勢いがあったから、条件反射で答えていた。でもそのあとようやく、もつと大変なことに気づく。「ママ」？ 今、確かにそう呼ばれたわよね。何を勘違いしているの、この子。だいたい何で、私のベッドにこんな小さな子が一緒に寝ているのよ。

「あの——」

話しかけようとしたとき、女の子はデジタル時計を見て、叫び声を上げた。

「たいへんっ！ ママ、ようちえんバスがきちゃう！ おねぼうだよ〜ねええ、はやく

ごはんつくって！ それからおきがえもだしてっ！」

とにかく彼女にとってはとんでもない緊急事態らしく、ぐいぐいと力任せにパジャマの裾を引っ張られた。え？ え？ どういうことなの？ どうなっているの！ もうもう、頭は大パニック状態。一体何がどうしちゃったの。だって私は「ママ」なんて呼ばれる筋合いはない。びかびかのOL一年生で、今日だってこれから出勤するんだ。

わ、七時半。大変、こんなことしていたらこっちは遅れちゃう！ どうしてちゃんと目覚ましは鳴らなかつたのかしら。昨日はシャワーを浴びた記憶もないから、これから一通りの身支度をして……ああ、間に合うかしら。

パニックつつも、頭の中であれこれと計算をする。シャワーに十五分、身支度に十五分……か二十分で、髪を乾かして、メイクして。わ、どう考えても八時十五分の電車には乗れない。受付の席には始業の十分前、つまり八時五十分までに着席している決まりなのに。やだ〜このままじゃ、絶対遅刻しちゃう！

「ママ？」

あ、また忘れていたわ。我に返ってみれば、さっきの女の子が不思議そうな眼差しでベッドの横に突っ立っている。うう、ごめん。悪いけどあなた邪魔なの、どいてね。

「ねええ、ママ。きょうのママはなにかへんだよ。おはようのきゆうは？ どうしてしてくれないの？」

「だ〜か〜ら〜っ！ 何なのよ、それは。こっちはそんな場合じゃないの！」

「そう心で叫びつつ、身体をずらしてようやくベッドから下りた。——と。」

「なあ、千夏？ グレイの靴下が片方、ないんだけど。昨日洗ったはずだよな」

「がちやり。格子に硝子のはめ込まれた目の前のドアが開いた。もちろんこれも見覚えのないもの。でも現れたその声の主に、思わずこんな叫び声が出た。」

「ま……横原……くん！」

「そうだ、間違いない。この人は同期入社で営業部の横原くんだ。その人がどうしてここにいるのよ？ 何故私の名前を呼び捨てにするの。昨日まで彼は私のことを「墨田さん」と姓で呼んでいたはずなのに。」

「千夏？」

「横原くんの方はちょっと呆けた顔になる。うわっ、今気づいた！ 彼、上はワイシャツを着ているけど、下は……何なのっ、下着一枚じゃない！ きゃあ、いきなりこれはないでしょう。目のやり場に困っちゃう！」

「ななな、何で。何で、横原くんがここにいるの。っていうか、ここはどこ？ 一体、何がどうなっているのよ！」

目を逸らしても、どうしても脳裏に今見たばかりの残像があり、知らないうちに頬が赤くなってしまう。え〜ん、自慢じゃないけど、男の人の下着姿なんて父親と弟のしか見たことないんだから。ばっちり確認しちゃったわよ。赤地にペイズリー柄のトランクスが頭から離れない。

「どうしたんだよ、何寝ぼけているんだ？ おい、千夏。どこか具合でも悪いの？ 今朝はいつまでも起きてこないと思ったら……」

自分でも知らないうちに腰が抜けていたのね。カーペットの上にしりもちをついて呆然としている私に、横原くんは遠慮なく近づいてくる。どうにかして視線を逸らしていたのに、とうとう視界にすね毛の生えた筋肉質な足が入ってきた。こんなものをまじまじと見ているも仕方ないもの、ゆっくりと顔を上げていく。

間違いない。昨日の今日にしては急に輪郭がシャープになって髪型も変わった気がするけど、やっぱりこうして間近で見てもこの人は「横原くん」だ。

「ねえ、これって一体どうなっているの。どうして、いきなり横原くんが出てくるの？」
しかも下着姿で——とはさすがに言えなかつたけど。それなのに、どういうこと。私の必死の質問に、彼は苦虫を噛みつぶしたような顔をしている。眉をしかめて、嫌みのひとつも言いたそうだ。

でもいよいよその口を開いて何かを言いかけたとき。彼の横をすり抜けて、もうひと

つの物体が子犬のように走ってきた。

「ま〜!! きゅう〜!!」

軽くてあたたかいものがあつという間に膝の上に乗って、胸にしっかりしがみついた。ぽよぽよの薄い茶色の髪が私の顎の下で揺れている。さっきの女の子よりも小さいな、それにこっちはつるつるの直毛だ。

「あ〜ずるいっ! ママ、りかばかりじゃ、やだ! なかも〜きゅう〜!」

傍らにいた女の子の方も、負けじと飛びついてくる。慌てふためく私を置き去りにして、ふたつのむにゅむにゅが押し合うように膝の上でうごめく。甘くて優しい子供の香りがあたりに充滿した。

「あ、あの……榎原くん……?」

本当に何がどうなっているのか、どうしていいのかわからない。いよいよ途方に暮れて、傍らで私を見下ろしている顔に話しかけた。

「これって……この子たちって……もしかして、榎原くんの子供?」

そういうえば、さっきの女の子。目元のあたりとか確かに彼に似ていた。間違いない。でも、子持ちなんて聞いてなかったよ? 結婚しているってことも知らなかったし。

「この子たちが俺の子供って……あのなあ、千夏?」

そう言いつつ、彼は私の顔を覗き込む。でもその眼差しからさっきまでの苛立ってい

た色は消えていて、心底、戸惑った顔に変化している。そして、一呼吸おいてから彼はとんでもないことを言ってくれた。

「そいつらは正真正銘君の子、君が産んだの。で、父親は俺。ちよつと待てよ? 今朝はマジでおかしいぞ、頭でも打ったか?」

すごく困っている様子なのはわかる。でも、そうはいつてもこっちだって――

「……はあ?」

何が何だか。パニック状態の頭で、ほつぺをつねったり瞬きしたり。でも全然夢から覚められない。これぞまさに晴天の霹靂。そんな風にして、私の新しい朝が始まっていた。

榎原くんは社内では新人ながらかなりのやり手と評されていた。この不況下において、営業畑でそれなりの実績を残すのは至難の業だと思う。なのにその道の先輩方がやっかむぐらいに、彼は断然目立っていた。

私とは同期入社だったけど、こちらは短大出身。彼の方は四年制大学を出ているし、一浪してる。だから実際は三歳年上になるのね。そうはいつても同期は同期。部署を越えての親睦会で何度も会っていたし、顔なじみではあった。でもそれだけのこと。

会社に「直接、営業先に回るから」と連絡を入れてから、彼はこちらにくると向き

直った。さすがにあの格好のままではいられなかったらしく、今はちゃんとストラックスをはいている。自力でグレイの靴下も探してきたみたい。アイスグリーンのシャツに合わせてモスグリーンの幾何学模様のネクタイを締めて、髪もきっちり整えてすぐにでも出勤できる体勢。

彼はその姿になってから、先程の女の子の大きい方「菜花ちゃん」を幼稚園バスの停車場所まで送ってくれた。ちなみに小さい方「梨花ちゃん」は朝のお子様番組にお世話をお願いしている。

明るい日差しがさんさんと降り注ぐ朝のダイニングで借りてきた猫のように身体を縮めて、私は椅子に座っていた。

「ふざけているわけ……ではないんだよね」

自分に言い聞かせるみたいにそう言いながら、コーヒーの入ったマグカップを目の前に置いてくれる。それから自分の分も同じように用意して、彼ははず向かいに座った。

よく見ると、このカップもベア。イラストは違うけど明らかに同じ作家によって描かれたもので、色は榎原くんが黄緑色で私のがオレンジ。実はスリッパも同様。

「そ、そんなわけないでしょう、冗談でこんなこと言えないわ。何度も説明したとおり、私は昨日までちゃんと会社に通っていたのよ。それが、目が覚めたらいきなりこんなことになっていて……本当に、何がどうなっているのかわからなくて……」

営業のノウハウをたたき込まれた、榎原くんの毅然とした態度にすくんでしまう。うう、この人には敵いそうもないわ。じつと相手の目を見る眼差しは、どこまでも穏やかでありながら決して標的を逃すことのない鋭さも同時に兼ね備えている。彼は今、私の真意を探っているのだ。でも、そうであっても私はひるんだりはしない。何が何だっておかしいんだから、この状況。

いつまでもパジャマのままじゃ変だし、私の方もとりあえず普段着らしき服装に着替えた。それがね、教えてもらったクローゼットを覗いて、またびっくり。出勤に使えそうなスーツ類はほとんどなくて、あるのはニットスーツやスウェット地のラフなもの。それどころか時々、え？と思うような花柄のフリフリな服を見つけたりして。

さすがにこれはないだろうと慌てたけど、隣のタンスに同じ柄の子供用があったから、どうも親子でお揃いにしたようだ。下着もおしなべて実用主義、デザイン性なんてどこかに行っちゃったみたい。パンツはおへそが隠れるくらい大きいし。

何より驚いたのは、鏡に映った自分の姿が一晚のうちに髪型から輪郭まで変わっていたことだ。さつき榎原くんを見て違和感を覚えたけど、あの比じゃないよ。アイロンでまっすぐに揃え、毎晩の手入れを欠かさなかった自慢のロングヘアが肩下で切りそろえられてる。それも寝癖のようなラフなウェーブ。色も心持ち染めてあるみたいで明るい。頬がこけている。肌の調子もあまり良くない。メイク道具が一通りかごに詰まっ

そのどれもが見たこともないパッケージ。「美白」や「保湿」に加えて、リフトアップとかそういう表示が多い。

そして見てしまったんだ、着替えのとき。一回り太くなったおなか周り。手足は元どおりに細いままだったけど、見えない部分には明らかに以前はなかった「たるみ」がある。お尻の肉もたれてきていて、とりあえずそれはガードルで包んだ。

私はすでに退職していて、出勤着になる必要はないみたい。それならばとクリーム色のニットスーツを着た。髪にクリームをなじませて整えると、カチューシャで形作る。鏡の前に立っている自分がどう見ても「OL」ではなくて「若奥様」であるのに気づき、ため息が出た。

カレンダーを見ると、日付は同じなのに、六年が過ぎていた。ここまで証拠を突きつけられても、やっぱり信じられない。大がかりに騙されているならその方がいいと思う。でも、そんなことされる覚えもないしなあ。

「う〜ん」

榎原くんは腕を組んで目を閉じてしまった。そうしている間にも、何か考えているのかもされない。

「若年性認知症というのも確かにあるんだけどな、それにしても急すぎるよ。だって、昨日の晩までは全く普通だったんだから。でも、千夏が今までのことをすっぱり忘れて

しまったんだと言うなら、今はそれを信じるしかないよな」

真剣にそう話す彼の後方では、こちらに背を向けてTV画面に釘付けで、あうあうと声を上げて身体を揺らしている梨花ちゃんがいる。

上の、今幼稚園に行ってるのが四歳の菜花ちゃん、こっちの梨花ちゃんは一歳三ヶ月なんだって。梨花ちゃんはどうやく歩くのが上手になって片言で色々しゃべるようになったが、とにかく人見知りが激しいらしい。そんな風に子供のことをあれこれ説明する榎原くんはどこから見てもいい「お父さん」だと思った。でもこの子たちを私が育てていたなんて。その上、私が産んだ子だなんて……

「で、六年前までのことは覚えてるんだね？」

「はい、……そうですね」

質問に答えつつ、何とも気恥ずかしくて落ち着かない気分になってしまった。おずおずと目の前の人を見る。榎原くんは私にとってただの同僚、ずっとそう思っていた。一体どういう経緯で私たちは結婚したのだろう。で、そうだよな。本当に子供をふたり産んだのだとしたら、最低でも二回は……その、あの……そうなんだよな。

この都内の2LDKの分譲マンションで五年以上も結婚生活を続けているのだと聞かされた（ちなみに二十五年ローンだったが、繰り上げ返済というのをして、あと十年分になっているらしい）。

さらに。左手にはまっていたマリッジリングを外して裏を見てみた。五年前の九月五日の日付が入っている。「T to C」という彫り文字……「T」は榎原くんのファーストネームの「透」の頭文字に他ならない。同じデザインのリングがちゃんと榎原くんの左手の薬指にはまっていた。

「——ま、仕方ないよ。こんなに簡単に忘れたんだったら、きつとすぐに思い出すと思うし。しばらくは気楽に考えて、ゆっくりしてなよ。それでいいじゃないか」

「え……?」

何とも簡単に結論を出し、こちらは驚くばかり。

「ちよつと、待ってよ。まさか、榎原くんはこのまま仕事に出かけちゃうんじゃないでしょうね? 私をここにひとり置き去りにして」

あり得ない、絶対にそれはないって言って。祈るような気持ちで答えを待ったのに、彼は容赦ない。

「まさかって、そりゃそうだろう。取引先との約束はすっぱかすわけにはいかないよ、そのくらい千夏だつてわかっているだろ」

そんな風にあつさり言わなくなった。ねえ、もう少し何か名案がないの?

「ええ、私、ちっちゃい子の面倒なんて見たことないわ。おむつだつて取り替えたことない、本当に困る、絶対にできない!」

ここまでくると、いい加減駄々子だ。大人げないもいいところ。でも駄目。引き下がれない。

「大丈夫だよ、今はパンツ型のおむつだから。時々覗いてみて、濡れていたら交換すればいいんだよ。あ、おむつは燃えるゴミね、毎回ちゃんと袋に入れて始末しないと臭うからそこだけ気をつけて」

彼はチラリと時計を見ると、さつさと席を立つ。これから出かけると、丁度いい時間なのだろう。

「え、え? 待って! 待ってよつ、榎原くん」

慌てて、彼のシャツの袖を掴んだ。話はわかるんだけど、すぐわかるんだけど。でも、ここに置いていかれたらやつぱり困る。夢ならば今すぐにでも覚めて欲しい。こんな悪夢はさすがにないと思う。

「だって、本当に何にも覚えてないのよ。というか、悪いけど今までの榎原くんの話だつて信じられないもの。これから菜花ちゃんのお迎えだってあるんでしょう、道端で誰かに会ったらどうするの。いちいち何も覚えてませんって言うの? それに、もしも電話がかかってきたら? 誰かが訪ねてきたら? 行かないで、本当に私、どうしていいかわからないのよっ!」

朝の日差しが眩しいダイニングとはあまりに対照的に、私の心は不安で今にも押しつ

ぶされそうだった。こういうのを錯乱状態と言うのだろう。心の中に疑問符が湧いてそれが次々に分裂していく。握りしめた袖に穴が開くくらい爪を立てて、ギリギリと音を立てる。必死で榎原くんを見つめていた視界がだんだんぼやけていく。

「……千夏」

ぼやけた視界に佇む榎原くんは、本当に困った表情になって目を細めた。私の大きく震えている腕を静かに解く。固く握りしめていたはずの手がするりと抜けてしまう。そのくらい暖かくて自然な行為だった。

「わかってくれよ、今日の商談は今後を決める大切なものなんだ。俺がいないと大口の注文がフイになっちゃうんだから。会社にそんな損失を与えることは、このご時世できないの。もちろん、今日はできる限り早く帰ってくるから」

テーブルの上のティッシュを取って、私の顔を丁寧に拭いてくれる。顎の方まで伝った涙の滴まで残さずに。その後、呆然としたままの私に彼はにっこりと微笑んだ。

「バスは角のところに着いて、そこで降りるのは菜花ひとりだから先生にお礼を言えば大丈夫。もしも誰か近所の人を通りかかったら、きつと菜花がすぐに声をかけるから。適当に相づちを打っておけばいいよ。別に千夏がみんな忘れちゃったことを話す必要はないだろう。きつとすぐに思い出すんだから」

「……榎原くん……」

穏やかな説得口調に段々乗せられていく。ぼんと頭の上に置かれた手が、やがてするすると髪を滑りながら頭の後ろに回る。にわか指先に力が込められて、そのまますつと抱き寄せられた。

「……!!」

あんまりに驚いて、反射的に払いのける。やだ、いきなり何するのよ。

「やっぱり、覚えてないって本当なんだ。そうなると駄目か、こういうの」

一方の彼は首をすくめて、ちよつと残念そう。

「駄目かって、当たり前でしょう。私と榎原くんはそんなじゃないもの、私にはちゃんと他に好きな人が——」

そう言いかけて、ハツとする。次の瞬間、見上げた榎原くんの顔が何とも複雑な色を見せていた。

「ふうん、好きな人。そうなんだ」

ああ、そうか。あれから六年も経っていたんだっけ。で、長い時間が経過して、私の今現在の気持ちはどうなっていたんだろう。

「え？ ええ？ あの……何だか混乱しちゃって……」

しどろもどろ、この気持ちはどうやって説明したらいいのかわからない。

「ま、戻ってきたらまた話の続きをしようよ。とにかく、行ってくるから。今日は家か

ら出ないで大人しくしてればいいよ。午後から雨って予報だし、そうなればさすがに菜花も公園に行こうとか言わないだろう」

今度こそ、本格的に時間が押しているらしい。さつきよりきつぱりと言うと、彼は上着を羽織ってコートを手にした。

「じゃ、気をつけて。——梨花く、パパはいつてきます、だよ」

声色が変わり、甘い響きで梨花ちゃんに声をかける。TVの画面を見ていた背中がくると振り向き、すつくり立ち上がった。

「ばばく、……ちやい」

多分彼女は『パパ、いつてらっしゃい』と言っているつもりなんだろう。ぼてぼてと歩いてきた小さな娘を嬉しそうに抱き上げて頬ずりする。そんな元同僚のすつかり父親している姿を、私はとても不思議な気持ちで眺めていた。

「は〜い、梨花。いい子でいるんだよ」

彼はそう言うと、私の方にくると向き直り、おもむろにそのひよこ色の服を着た小さな生き物をこちらに手渡してきた。

「じゃ、頑張つて」

柔らかい温かさに気を取られているうちに、彼はっこりと微笑むとさっと手をあげる。

「ちよ、ちよつとおゝ榎原くん」

ドアの向こうに消えていく唯一の頼りを、途方に暮れて見送る。腕の中のひよこが身体が揺れるぐらい大きく手を振り続けていた。あんまり元気が良くてずり落ちそうになつたお尻を支えて揺り上げる。

その仕草が自分の意思とは裏腹にちゃんと形を覚えていた。

2

「透？」
とあろ。

もちろん知ってはいたものの日常では口にしていなかつた彼の名前が、私の口からどこかしげにこぼれた。そのときの私は、何とも複雑な表情をしていたのだろう、榎原くんの方は何だか楽しそうだ。

「そう、千夏は俺のことそう呼んでいた。同じように呼んでくれたら、もしかして何かをきっかけに思い出すんじゃないかと思って」

「は、はあ……」

そうは言われても、いきなり同僚のことを、ファーストネームで呼び捨てにするのは

気が引ける。これではまるで恋人同士みたいじゃない。あ、いえ。今の私たちはそれよりもっとすごい「夫婦」って関係らしいのだけど。そんなことは今の私が知ったことじゃないもの。

夕方、榎原くんが五時過ぎに戻ってきたときにはどんなにホッとしたことか。玄関に子供たちと共に迎えに出た私に、彼は吹き出した。それって、ひどい。こちらの苦勞も知らず、失礼すぎると思う。

「だって。あんまりにも情けない顔するんだもん」

彼はくすくす笑いながら、レタスをむいている。

子供たちはやはり夕方のお子様番組に子守して頂いて、私たちはとりあえず、榎原くんが帰りに買ってきてくれた材料を使って夕食を作っていた。すごいなあ、TVって有能なベビーシッターになるんだわ。

対面式のカウンターキッチン結構広く造られていて、使いやすい。我ながらきちんと掃除をしていたらしくぴかぴかのシンクに惚れ惚れした。つり棚には食品保存用のパックが整然と並んでいて、買い置ききのラップやホイルもある。流し下の戸棚にも鍋やボウルなどの調理道具が取り出しやすくしまわれていた。どれも初めて見るものなのだけど、やはりどこか懐かしいような不思議な気分になる。

一日中ボーっとしていても仕方がないので、朝からずっと勝手のわからぬ家の中をうろろして、そこら中を物色していた。不法侵入でもしているみたいで気が引けたけど、よくよく考えたら私の家なんだから。それでもいちいち不思議な気分だった。

「そんなこと言ったら、本当に大変だったんだから。梨花ちゃんときたら、抱っこしてればとてもご機嫌なおろした途端に私を追いかけ回して大泣きするんだもの。ト、トイレにすら入れなくて……泣きたくなったんだから」

今夜は菜花ちゃんの好物だというハンバーグを作っている。挽肉をこねながら、何ともやるせない気分になった。

私は三人姉弟の一番上で、当然下の弟と妹の世話はしていた。でもさすがに赤ちゃんのお世話なんてしたことない。早く結婚した友達や従姉の赤ちゃんを抱っこさせてもらったことはある。でもこんなふうにはひとりきりで何時間も面倒見たことはないし。得体の知れない生物との接触は、想像以上に体力と精神力を消耗した。

「千夏、結構子育てを楽しんでいるみたいだったんだけどな」

雑談を続けながらも、ものすごく器用な手つきでスパゲッティのサラダを仕上げている。銀杏切りのリングと缶詰のみかんは子供仕様かしら？

「榎原くんって、料理が上手なんだね」

思わず、口について出てきてしまう言葉。不思議そうに私を見上げた顔が、そのまま

嬉しそうに、にっと笑った。

「改めて言われると、それはそれで嬉しいもんだな。学生時代、レストランでバイトしていたんだよ。だから家で普通に食べるメニューなら、一通り何でも作れるよ」

「ふうん。で、私より、上手だったり……した？」

自慢じゃないけど、私の料理の腕はたいしたことなかった。一人暮らしでもほとんどコンビニやスーパーのお総菜に頼っていたもの。おみそ汁でさえ満足に作ったことがなかった。作って作れないことはないのだけど、ほらひとり分を作るのってかえって不経済だったりするでしょう。

そういうえば、さつき榎原くんはわざわざ煮干しでだしを取っていたな。私、顆粒^{かりゅう}のだしの素しか使ったことないのに。

「あ、とりあえずハンバーグの焼きは俺が担当するから。千夏のは表面は素晴らしく焦げ色付けて、生焼けなんだよな」

「……そう」

私は手にしたフライパンをそのまま彼に手渡した。何だか今までの日常が目に見えなくなるように悲しい。私はこの人の前でどれくらい多くの失態をしてきたんだろう。

じゅうじゅうという音にお膳立てをしながら振り向けば、彼はハンバーグを焼いたフライパンの中にケチャップやソースを入れて、即席のデミグラスソースもどきを作って

いる。ハンバーグって、焼いたのにお皿の上でケチャップをかけるんじゃないかかったのね。そんなこんなで出来上がった夕食はほとんどが榎原くんの手によるもの。正直、とてもおいしかった。

食後、彼は当然のように食器洗い機に汚れ物をセットしてくれて、コーヒーを用意する。極上の香りに部屋中が満たされるのを待つ間、私は洗濯機の使い方を聞いた。

そうなの。まあ、やることないし、洗濯でもと思って、午前中に洗面所に入って驚いた。当たり前といえば当たり前だけど、電化製品も洗濯機を含め、すべてが私の知っているものとは姿を変えている。ボタンがたくさん付いていて、どこを押したら動き始めるのか悩んじゃって……結局そのままにしちゃったのね。

こんな風に事実を突きつけられていくと、次第に私の中にある「担^かがれているのかな」という期待が徐々に消えていく。でもやっぱり、そうであっても受け入れるにはこの状況変化は大きすぎる。絶対に無理って、榎原くんだって今にきつとわかってくれるよね……？

菜花ちゃんと梨花ちゃんはお昼寝をほとんどしない代わりに夜早く寝る。お風呂は帰ってきてすぐに榎原くんが入れてくれたので、ご飯のあと、簡単な寝かしつけをしたただけで、子供たちは休んでしまった。

でも。このお風呂が……また。だって、入れてくれるのは彼でも「もういいよ」と言われてバスタオルを持つていくのは私。がちやつとバスルームのドアが開いたら、湯気の向こうに……あの。

声にならない悲鳴を上げて、慌てて顔を逸らしちゃったわよ。でも、こういうときって、やつぱ、一番に目がいく場所が……ううう、一瞬、見ちゃったじゃないの。

「ママ、どうしたの？ おかおがまっか」

ドアに背を向けたまま、うずくまっていた私に不思議そうに菜花ちゃんが聞いてくる。子供相手にいつまでもうなだれているわけにもいかず、びしょびしょのはだかんぼうをタオルで包んで拭き上げた。で、菜花ちゃんはいいいのだ。だって、自分で歩いて出てくるから。問題は……

「ほら、千夏。梨花が出るよ」

すぐ背後で声が出た。そうなの、梨花ちゃんは足元がおぼつかない赤ちゃんだから、滑ると大変。いつも手渡しで受け取るらしいのだ。

「う、うん」

腰にタオルでも……ああ、巻いてくれないな。仕方ないからできるだけ顔を背けて、正面を見ないようにしながらバスタオルを広げて受け取る。

「何だよ、千夏」

そのまま、くるんと回れ右をした私に榎原くんが眩く。

だからもう！ わかってよ……男性のヌードを鑑賞する趣味はないんだから。まあ彼にしてみれば、妻である（らしい）私に今更照れることもないだろう。でも私は、今の私には榎原くんとはただの同僚だと思っていた六年前の記憶しかないのだ。日常生活とはいえ、こういうのは困る。

後ろのドアは元どおりに閉められて、彼はシャワーを浴び始めたらしい。硝子のドアにしゃわしゃわと水の当たる音がする。マンションと名が付いていても、やはりお風呂は狭いのだ。それでもまあ、ユニットバスだった私のアパートよりはいいかな。

「あああ、もうっっ！」

私はバスマットの上にはしゃがみ込んで、今日、何度目か知れないため息をついたのであった。

「飲む？」

カットグラスをふたつ出してきた榎原くんは、その片方を私の目の前に置いた。いつもこんな風に私の分の飲み物を用意してくれるのかな、とても慣れた手つきなのね。もちろんありがたかったです。

ようやく小さな子供たちがいなくなつて、ふたりきりでゆっくり話が出来るようにな

った。あの子たちがいると五分もおかずに途切れなく何か言いつけられる。ぼんやりともの思いにふける時間もない。

梨花ちゃんも赤ちゃんのはずなのに、自己主張が強く三歳上のお姉ちゃんと対等におもちゃを取り合うのだ。引つ張り合って、取られた方が大泣きをする。そういうやりとりも頻繁に起こった。もうどうしていいんだかわからない。

菜花ちゃんはひとりじゃトイレに行けないし、梨花ちゃんに至ってはおもむつだ。しかも誰がしつめたのか、お尻が濡れると新しいおもむつを出してくる。いいことだと素直に感動していたら、どうもおもむつを持って歩くことそのものが彼女のマイブームだったらしく、いつの間にか納戸をおもむつだらけにされてびっくり。包みの端っこを器用に指でこじ開けて、買い置きであったらしい三パックがすべてが床にばらまかれていた。とても一歳三ヶ月の赤ん坊の作業とは思えない。

とぶとぶとぶ、注がれたのはロゼのワイン。これと同じ瓶が納戸にいっぱい置いてあって何かと思ったら、ポーナスの一部が現物支給だったと聞いて驚いた。ウチの会社はワインを扱っていないよ。そうじゃなかったのかと聞いたら、取引先がお金で払いきれず、ワインで払ってきたという。そんなことであるのだろうか。今は物々交換の時代なのかしら。

「で、何か思いだしたの」

ワインを一口飲むと、榎原くんはおもむろに切り出した。いきなり核心を突いてくる。きつと一日中聞きたくてうずうずしていたんだと思う。

今、私たちはご飯を食べていたダイニングテーブルではなくて、TVの前に置かれたソファーの方にいる。それはいわゆるラブソファーというやつで、榎原くんにどかっと腰を下ろされると私の座る場所はない。避けてもらって座ればいいのだろうけど、なんとも微妙な距離感に躊躇ためらってしまうのね。

結局、低いテーブルにしがみついてラグマットの上じかに座り込んだ。榎原くんとは九十度の位置。でも今までの私はどうしていたんだろう、当然のように彼の隣に座っていたのかな。ううん、そんなこと。未だにこの目の前の元同僚と結婚して当たり前に生活していたなんて信じられないのに。

「ごめん、何も」

首を横に振る。すごく申し訳ない気分になる。その後、そつと榎原くんの顔を覗き込んだ。

「何？」

瞬まはたきをふたつ。眉間にしわを寄せて難しそうな顔をする。

「別に……何でもありません」

彼の顔を穴が開くほど凝視してみたところで、何かが浮かんでくるわけでもない。六

年の時間を飛び越えた同僚が、私が知っているよりもずっとラフな格好でソファに身を沈めているだけだ。

昼間のこと。

マンシヨン探索の途中。廊下に造り付けられた戸棚の扉を開くと、一番下にずらっとアルバムが入っていた。菜花ちゃんと梨花ちゃんの産まれてからのものがそれぞれに数冊。それから、ひときわ目を引く真っ赤な表紙のものを見つけて開いてみたら。そう、それはまさしく結婚式のアルバムだったのだ。仮装大会としか思えない私と、他でもない榎原くんの和装と洋装の式服姿がいっぱい。自分の写真なのに、何とも気恥ずかしい。ウエディング・ケーキの入刀、キャンドルサービスに花束贈呈。真っ赤になりながらそれでも一通り見ていると、いつの間にか横から覗いていた梨花ちゃんが嬉しそうにDVDを持って歩いてきた。

「あい、……あい」

そうか、これが観たいってことね？ そう思っただけで一応再生してみたら……ぎゃあ、何コレ！ 結婚式を録画したものじゃないのっ！ 動いているとさらに恥ずかしさ十倍！ でも、コレの存在を赤ちゃんの梨花ちゃんですら当然のように知っているということは、もしかして何回も観てるってこと？ しかも家族で。そんなのやめてよね、全

くもう。

「なあ、こんな言い方すると信じてないようで悪いんだけど。本当に、俺のことをからかっているんじゃないよね？」

そう言いながら、彼はタバコに火をつける。一応、子供たちの前では禁煙しているみたい。蓋の付いた吸い殻入れを棚の上から持つてくる。空气清新機を自分の方に向けて、フーツと息を吐いた。

「からかっているんじゃないわよ。そんなことして、何か私にメリットでもあるの？」
「ここまで言われると、さすがにムツときた。そりゃ、信じられないのはわかるけど、やっぱり嫌な気分。そんな私の視線に気づいたのだろう、榎原くんは照れたように笑った。

「ごめん、ごめん……だって、昨日の今日だし」

「……は？ 昨日の？」

「どういうこと？」

そのとき、ふたりの間の空気がわずかに揺れた気がした。思わず、本能的に後ずさるうとすると、それよりも素早く榎原くんの右手が私の左腕を取った。彼は左手に持ち替えたタバコをもみ消す。

「ななな、何？ ちょっと、離して！」

マジでやばいと思った。何なのよ、いきなり何するのよ！

ふるふると震えている私の腕を掴んだまま、彼はその笑顔の色を変えた。——何と違うのか、意味深で……それに、何かを含んでいるような。

「千夏が、言ったんだよ、今夜から解禁にしようって」

「……え？」

わたしはそのままバランスを崩して、仰向けにラグの上に倒れ込んだ。その上に勢いよく覆い被さってくる榎原くん。あんまりのことに言葉も出ない。驚きに恐怖の色を上塗りした表情でいるだろう私に、天井に埋め込まれた白熱灯を背にした彼が言い放つ。

「三人目、そろそろ作ってもいいって言ったんだよ。だから、生理が終わったたら、生でできるって」

「……え……」

あまりのことに、声がひっくり返ってしまう。喉の奥でぐぐもる裏声。何よ、何よっ、それって！ どういうことなのよ！

心と身体の手がパニックの極みにいる私に対して、どこまでも余裕の笑みを浮かべる榎原くん。両方の手首をマットの上に押さえつけられて、これじゃ身動きもできないじゃないの。

ふわっと。顎のあたりに髪の毛の気配。音もなく、彼の身体が私に接触してくる。首筋に生暖かいものを感じた。

間違いなくこれは榎原くんの吐息だ。次の瞬間、もろに首筋にくっついた感触。生ぬるくてちよつと湿っていて、これは……その。

「千夏」

左の首筋からゆっくりと下りてきたそれが肩に辿り着いたとき、初めて離れる。それから鎖骨をつつと通って、そのまま胸元に潜り込んできた。そのときになって、ようやく身体に血の通った感覚が戻ってくる。

「やああっ！ やめて！ 本当に、やだっ！ 放してっ！」

完全に榎原くんのペース、このままでは本当の本当にやばいと思った。とにかく力の限り手足をバタバタと動かして抵抗する。どう見ても力の差は歴然としていたが、それでも彼が一瞬ひるんだ隙に飛び退いた。そのまま一気に掃き出し窓のところまで身体を移動する。まあ、これで背後に逃げ場がない状態になったので、にじり寄せられたら対処のしようがないけど。ああ、まだ心臓がばくばくいつてる。今にも壊れそうな涙腺、どうにかなっっちゃいそう。

「千夏？」

対する榎原くんの方はぼかんとして、そのままの位置で起きあがると姿勢を正した。

「榎原くんっ、ひどい！ いきなり何するのよ！」

はだけた胸元をぐぐつと押さえて、精一杯威嚇する。これ以上何かしてきたら、今度

は反撃しちゃうから。私だって、やる時はやりますからね！

「何って、あの、やつちやいけなない？ それがきつかけになって、思い出すかもしれないし！」

何なのつ、この人。いきなり襲ってきたくせに、しゃあしゃあとよく言えるわね！

「信じられない！ 常識のある大人が、いきなりこういふコトするっておかしいわ。ちよつと、コレは一步間違えばレイプよ、レイプ！ 榎原くんなんて、警察に逮捕されちゃうんだから」

せいせい、肩で息をしつつも私は必死。だって、この人は今この瞬間だって気を抜いたら何をやり出すかわかったものじゃない。柔らかな物腰で聖人君子みたいに見えるけど、そんなの見かけだけのものだったんだわ。

「……レ？ ……おい？ 千夏。俺たちは夫婦なんだぞ、夫婦だったらこういうの当たり前じゃないか。それに君が『解禁』なんて言うから、こっちは滅茶苦茶期待して——」

しどろもどろになりつつも、言うべき点はしっかり押さえて意見してくる。さすがやり手の営業マン——と、そんなことに感心している場合じゃなかったわ。こっちは貞操の危機に直面しているんだから。

「ま、榎原くんがどんなことを考えて、どんな風に期待したかは知らないわよ。でもつ、私は絶対に無理！ そんな気にはなれない。榎原くんはただの同僚だもの、それ以上の

感情はないから」

そうだもの、まさしくそのとおりだもの。私、間違ったことは言っていないよね？

「感情って、それ何なんだよ？ だいたい千夏、俺たちもう六年もこういうこととしてきているの、当たり前。君が忘れてたって、事実はそういうことなんだから」

そこまでしっかり言い切られると、さすがにうろたえてしまう。確かに彼の言うことはもつともなことかも。夫婦の夜の生活、仮に週に一度のペースだったとしても……もう何百回もよろしくしていることになるんだ。

でも、そんなこと言われたって「はいそうですか」とは納得できない。私は、今の私は、榎原くんの彼女でも奥さんでもない。身体はすでにそういうものなのかもしれないけど、気持ち的には違うんだから。

今日は朝からいきなり言葉も通じない赤ちゃんと幼児を相手することになり、何が何だかわからないままの一日を過ごしてきた。受付のカウンターの前に座ってにこやかに「いらつしゃいませ、どちらにご利用でしょうか？」という生活を続けていたはずの私が、おむつと鼻水と着替えと幼児用ヨーグルトとオレンジジュースと、その他諸々の見たこともないパーツに囲まれて。それでも相手が赤ちゃんと子供だから、聞き分けがないのは当たり前だと我慢してきた。

でも、榎原くんはとつと大人じゃないの。私の置かれた状況を正しく理解してくれ

たつていいはずだ。少なくとも、今の私には彼以外に頼れる人間も見つからないわけだし。それがこんな、考えようによつては子供よりもよほど始末の悪い行為に出ないで欲しい。息も絶え絶え、涙目で睨み付ける私の視線の先に、困ったような情けないような表情の榎原くんが佇む。お風呂呂に入ったばかりで無造作に落ちている前髪のせいで、昼間の姿よりも若く見える。あれから六年経つて、榎原くんは今年三十になったそうだ。対する私も二十七歳になっているらしいから、それも当然なんだけど。

「それに千夏、君だつてこういうの決して嫌いじゃなかったぞ。身体は絶対に反応するつて、そうすればあとから気持ちも必ずついてくるから——」

うわっ、この期に及んでまだそんなことを言うの。信じられない人だわ。

「嫌！ 嫌と言つたら嫌なの！」

仕方ない。こっちは大きなクッションを抱きしめて、前方のガードに入る。こうなつたら、パフォーマンスで気持ちを支えるしかないわね。

「……千夏」

それでもなお半開きのままの口元、切なそうな瞳の色。私の一メートル先で発せられるうねつた空気。

どうしてこんなことになっちゃったんだろう。榎原くんは女性社員の中でダントツに人気があった人だ。芸能人にはあまり詳しくなかった私にはわからないけど、なんとか

つて若手の俳優の名前を挙げて似ているという声もあったほど。少なくともルックス的には同期の男性陣の中で抜きんでいたと思う。背だつてわりと高い方だし。

飲み会があれば酌に行つて言葉交わすくらいのははしていた。やり手の社員だと聞けば、どんな感じの人かと興味を持つたりもするでしょう。受付嬢の中にも熱を上げている人はいたし——でも私にとつて彼は「それ以上」の存在ではなかったのだ。それが、何で、どういう経緯で私たちはこんな関係になったの？

この距離感つて、とてつもなく危険。私がちよつとでも承諾の表情を見せれば最後、襲われてしまうのは必然だ。それだけはどうにか回避したい。

「や、何があつても駄目だから！ そういうことするつもりでいるんなら、今から実家に帰る！ この時間ならまだ電車はあるでしょう、駄目ならタクシー拾つてでも帰る！」

「な、何を言い出すんだよっ」

薄手のスウェットを着た榎原くんが慌てている。でも私は本気だもの、こんなやつて困るんだから。榎原くんとそういうことするなんて、想像もできない。絶対の絶対には、無理だから。

しばらくは無言の睨み合いが続いた。でも彼にどんな怖い顔をされたつて私は平気。クッションから詰め物がはみ出るくらいきつく抱きしめて、こちらも負けじと睨みを返した。

「——わかった」

やがて、深くため息をついた榎原くんがラグの上から立ち上がる。そして髪をかき上げながら、元どおりソファーに深く腰を下ろした。

「今日のところは降参する、だからそんなこと言うなよ。今出ていかれたら正直困る。俺はともかくとして子供たちはどうするんだ、そう頻繁に休みが取れる立場じゃないんだからな。今週末の休みは予定を入れないようにするから、そこまで君は母親業に専念して欲しい。でも、千夏がこんなに強情だとは思わなかったな」

ずるい、そんな言い方しなくたっていいじゃない。何か、私の方が悪者みたいに思えてくるよ。

「強情なんて……そんなじゃないもの」

私だって、自分でなりたくてこういう風になったわけじゃない。そうは思うものの、私を見る榎原くんの視線が本当に悲しそうでちよつとだけ切なくなる。

どちらかというところ、追う恋愛ばかりしてきた。だからこんな風に強く求められることもなかったし、正直昨日の私は六年後にこんな風になっているなんて夢にも思わなかった。結婚願望がそれほど強かったわけではないし、あのまま縁遠く生きていくんだらうなと諦めてた。

あー、そんなこと考えたら自分が可哀想になってきたじゃない。私はずるずるとテー

ブルのところまで戻ると、さっきのワインを一気におおった。甘酸っぱくて、その後すぐに渋味が追いかけてくる。

「もう少し、飲む？」

榎原くんは座った姿勢のまま、前のめりになってワインを注いでくれる。目の前でグラスが満たされていくのをぼんやり見たあと、顔を横に向けると至近距離で彼と目が合った。

「あんまり、考え込まないで。本当に悪かったって思ってる」

そんな風に言いながら、大きな手のひらがぼんぼんと私の頭の上で弾む。何だかじんわりと温かかった。まだとても気を許すつもりにはなれないけど、このぬくもりは嫌じゃないなと思う。

私は一体、この目の前の人とどんな風に長い時を過ごしてきたのだろう——そんなことをふと考えてしまう。切り取られてしまったその時間を覗いてみたい気もする。でも、それをきれいさっぱり忘れてしまったのにはやっぱり何か訳があるんだよね？ そう考えたら、このままでいいかなとも思う。

「ううん、私の方こそ……ごめん」

そう言いながら、ワインを口を含む。さっきよりも渋みが強く口の中に広がっていった。

次の朝は目覚ましの合図ですっきりと起き上がることができた。習慣ってすごい、身体はちゃんと覚えているって本当なんだな。一方、榎原くんは向こうのベッドでまだまだ夢の中。

眠い目をこすりながら身支度を整え、キッチンでこそごと朝食の準備をしていると程なくして「おはよう」と声がした。顔を上げると、カウンター越しに昨日の晩のことなんて忘れてしまったように見える彼の笑顔。

「あ……おはよう、榎原くん」

私の受け答えに、彼の顔がふっと曇った。どうも向こうは記憶が戻っていることを期待していたらしい。

「千夏に『榎原くん』と呼ばれると、急に遠い存在になった気がするんだよな」

そんな風に言われたって、困っちゃうんですけど。

「だって、仕方ないでしょう。私には『榎原くん』なのよ、他の呼び方なんてできないわ」
そう答えつつ、冷蔵庫から卵をパックごと取り出す。本当は私のことを呼び捨てにさ

れるのもちょっと違和感があるの。でもそこまで禁止したらさすがに申し訳ないかと思うし。

「あ、目玉焼きだったら、俺は卵二個。両目にして、半熟ね」

頭だけシャワーで濡らしたみたい。肩から下げたタオルで滴を拭う。伸びかけた髪、洗えばなしの髪——正直、男の人のこんな朝の姿を見るのは肉親以外では初めてのことだ。ちよつとドキドキするね、口には出さないけど。

うーん、これってどう見ても夫婦のひとコマだよなあとか、そんなことをつい考えてしまう。そうは思ってもこの目の前の元同僚が自分の夫であるとは未だに認識できないし、したくもないけれど。

「はい、どうぞ」

カウンターの上に朝食のお皿を乗せる。両目の目玉焼きとトマトとレタスと……昨日の残りのスパゲッティーサラダを一口。それを受け取る榎原くんがくすりと笑う。

「どうしたの」

つい敏感に反応してしまう。今度は何を思ったの。

「あ、ごめん。ちゃんといつも同じ皿が出てくるから、不思議だなあって。でも俺はトーストにはジャムじゃないんだ」

そう言いながら、冷蔵庫の方に回って自分で「つぶつぶピーナッツバター」を出して

いる。あら、コレは菜花ちゃんのものかとはばかり思ってたんだけど、実は横原くんのだったのね。

「やっぱり覚えてないんだな」

そんな風に納得していたりして、ちょっとおかしい。

身体が覚えていることはある。お皿の位置とか、冷蔵庫の中のどこに何を入れるとかの細かい配置とか。でも横原くんがどのワイシャツにどのネクタイを合わせるかとか、コーヒーにはクリームじゃなくて牛乳をとぼんと入れることとか、そういうことは忘れてしまっている。

だからまだ、何となく納得できていない。私がこの人の妻だったこと、私たちが夫婦だったこと。それと同じように横原くんの方も私が本当に記憶をなくしているのかを未だに疑っているようだ。時々探るようにこちらを観察してる。

「今日は水曜日だから、帰りの園バスが早いからね。一時半に来るから気をつけて」

確認されて、思わずメモを取る。うん、忘れずに行かなくちゃ。

あのあとふたりで話し合って、身内を含めて周囲の人には私のこの状況をあえて知らせないことにしようと決めた。接触することがあったとしても、何となく話を合わせればいいということで。丸一日を過ごしてみてもわかった。数年分の記憶が抜け落ちていても日常生活にたいして支障はないのだ。

あまり近所づきあいのない土地柄だと言うし、マンションの隣近所は共働きで顔を合わせることも少ない。どうにか乗り切っていこうということになった。もしかしてあつという間に記憶は戻ってくるかもしれないし、そうなったときのことを考えるとあまり大事にするとかえって煩わしいことになりそうな気もして。

「困ったときはすぐに連絡して」

仕事用とプライベート用のふたつのナンバーとアドレス、私の携帯にはそのどちらもが一番最初に表示されるように登録されていた。付けているストラップもお揃い、ちなみに彼の待ち受け画面は家族四人で撮った写真になっている。

落とした記憶の破片がそこらじゅうに散らばっていることに、いちいち驚かされていた。どこを見てても幸せな日常ばかり、でもあまり度が過ぎているとかえって嘘くさく思えてくるのは、私があまのじゃくだから？

その上、出かける彼を玄関まで見送ると、信じられないことまで言う。

「いってらっしゃい、って。ここにキスしてくれるの、毎朝。しかもとびきり甘いやつ。それだけじゃないよ、このまま離れたくないって抱きつかれて困ることだって頻繁なんだから」

はあ？

思わず目と口を開きっぱなしで、横原くんの指した場所を見る。右の頬に……本当に？

そしたら次の瞬間、彼はふっと吹きだした。

「楽しい、思いきり本気にしたな?」

ワntenポ遅れて、やっとからかわれていたことに気づいて唾然。

「ままま……横原くんっ!」

トマト色の頬になってしまった私を嬉しそうに眺めてから、彼はドアレバーに手をかける。

「いつてくるよ、今日も一日、頑張ってる」

もう、横原くんがこんな人だとは思わなかったわ。どちらかというところ数も少ないほうで、そんな人がどうして営業成績を上げられるのか不思議だったっけ。

目の前で閉じたドアを見つめてたら、色々な最近（でも、実は六年前までのなんだけど）の記憶がじわじわと甦^{よみがえ}ってきた。

私には恋愛運がない。それは自分でもよくよくわかってきた。

最初は幼稚園のときの初恋。

覚えたての平仮名で折り紙の裏に手紙を書いた。なのに同じクラスの彼は実はまだ字が読めなかったのね。とうとう私の気持ちを理解することなく、その後彼はお気に入りゲームと一緒にやってくれる子と付き合いました。

こんな風に思い出すとあまりに馬鹿馬鹿しいけど、この出だしのつまりがその後の人生に暗い影を落としたのではないかと思うこともある。

小学校時代にもいくつかの思い出したくない記憶がある。まあ、小学校のほとんどはガキ大将タイプの男の子に目を付けられていて「俺のスケ」状態だったのだ。あれでは好きな男の子ができて相手も相手が引く。別にその悪ガキのことなんてどうでも良かったのに、どうして相手が私のことに執着していたのかわからない。

中学生になってそいつと学校が別れたときには、やれやれと思った。そして中三のとき、同じクラスになった男子と結構いい感じになる。彼はサッカー部のレギュラー、颯爽^{さつそう}としたその姿はたまらなく格好良いのに全然気取ったところがない。ほんわかと少女漫画のような恋をした。体育館の裏でキスしたり、お弁当を持って練習試合の応援に行ったり。でもねえ、早熟な彼が身体を求めてきたときはさすがに躊躇^{ちゅうちゆ}した。いくら何でも中学生だ。授業で性教育を習ったとはいえ、怖かった。もしもニンシンとかしたら、どうするの? 産むの? まさかねえ、堕ろすんだろ? そういうのって、嫌だな。

で、そんなこんなしているうちに、別の中学の女子に彼を寝取られてしまった。呆然としている間に彼の方は相手の女の身体に夢中になりそれっきり。少女マンガな恋は花開く前に散っていったってわけ。その後彼は成績も下降の一途を辿^{とど}り、どんな馬鹿でも受かると言われていた高校にまで落ちて、プーターローになってしまったんだけど。それ

を考えると危ういところで難を逃れたと言うべきか。

高校に入ってからはずっと『思う人には思われず、どうでもいい奴ばかりが寄ってくる』という最悪の方式の中にとっぷり入り込んでしまった。

「あなたは、理想が高いのよ。女は好かれた相手と付き合うのが幸せよ。たくさん貰いでもらえばいいじゃないの、馬鹿ねえ」

スカートをパンツが見えるぐらいまで短くした友人は、私のことを馬鹿にしてそう言う。みんなやりたいようにやって青春を謳歌おうかしていた。援交してる子だって少なくなかったと思う。一回寝るだけで何万ももらえると聞いたときはちょっと心が動いた。でも、クラスメイトが腕を組んで歩いていたのが、頭のつるつるな、いかにもヤーさん入った悪徳商売やってます風のおじさままで——いくら何でもあんなのは嫌だなあと思った。

それなら同じ高校生や大学生の中からチョイスするかと頑張って合コンに出たりする。でもそこでも巡り逢うのは究極の勘違い男が多い。まるで私の陰の磁気に吸い寄せられるかのように、とんでもない男性ばかりが寄ってくる。ああ、そんなことを言ったらさすがに失礼か。でも、やっぱり人間は感情の動物だよ。好みというものがあるでしょう？

どうも私は、本当の自分よりもずっとしつかり者に見えるらしい。だからマザコンの気が強いような男性ばかりに好かれる傾向にあった。その手の輩は「君のすべてが素晴らしい！」とかなんとか息巻いて、始末に負えない。ちょっとお茶してあげたら「俺の

女」状態、ご飯を食べたら次はママに紹介？ どうなってるの、今時の女性週刊誌だっでここまで大袈裟おおげさじゃないわ、という感じだった。

何度か痛い目を見たあとで懲りて、その後は言い寄る側に転換した。しかし、これこそが振られ人生の幕開けだったのである。

誰かを好きになる。その瞬間はいつも突然にやってくる。私は友達に言わせれば結構面喰いな方らしいけど、自分では意識したこともなかった。

「こんにちは、よく会いますね？」

そう言うって、声をかけてきた人。実はこちらとしても気になっていた。短大一年の夏休み。ようやく受験戦争から脱出したんだから今年くらいは楽しもう。そう言ってシンドルの友達と企画した北海道旅行だった。

休みの前半はふたりとも死にもぐるいで資金稼ぎ。丁度お中元のシーズンなので、デパートの商品包装のバイトがいくらでもあった。指紋がなくなるぐらい頑張っって働いて、ささやかなお給料袋を手にする。

ユースホテルと安いビジネスホテルを渡り歩いて、ほとんど全土を回っていた。暇はあっても金はない、私たちみたいな貧乏学生は、夏休みという時期もあって他にもたくさんいる。服装や素振りですれは一目でわかった。白いTシャツとブラックジーンズ

のライダーさんがいて、行く先々で彼を目にする。あるとき広い丘で休んでいると、爽やかな笑顔で近づいてきた。

白い歯がこぼれて印象的で。真っ青な広い空の下、私の胸がどきんと鳴った。

「そう、今時、巨人ファン。しかも名古屋でさ、もう肩身が狭いったら」

適当に話題を振っていたら、いつの間にかプロ野球の話になっていた。肩身が狭いなんて言いながら、彼はとても楽しそう。

「それだったら、杏奈ちゃんと一緒にだね。杏奈ちゃんは東京ドームでバイトしてるんだよ?」

「へえ、そうなんだ」

私と一緒に旅行していた友人は大学の巨人ファン。短大からそれほど離れているわけではない巨人の本拠地・東京ドームでビール売りのバイトをしていた。観客席を歩いて、声をかけられると売る、というあれだ。

「じゃあ、対戦も見放題なんだね」

わかりやすく身を乗り出した彼は、羨ましそうに友人にそう訊ねる。

「実はそんなことないの。試合がいいところになると、お客さんも次々と声をかけてくるから試合なんて見ていられない。あのバイトはあまり良くないわ」

杏奈ちゃんは首をすくめて、つまらないのよ、と微笑む。

さらに彼は高校球児だったと言った。なんと甲子園に行ったんだって、夏の。一回戦で負けちゃったけど、県で優勝をしたときは観客席のフェンスを叩いて、大泣きしてまったと言っていた。大学でも野球をやっていたけど肩を壊して、選手生活を終えたそう。さつさと就職も決まり、こうして最後の学生生活を楽しんでるんだって。

彼の言葉に私はぐいぐい引き込まれた。日常生活から切り取られた世界がそうさせたのかもしれない。刹那の出会いで私は彼に恋をした。

旅行が終わって、私の手に残ったのは彼の携帯の番号とメールアドレスだけ。それも本人が言っていたようにほとんど留守電で、なかなか繋がらない。

「これは、積極的に行くしかないわね」

杏奈ちゃんは明るく笑いながらその後押ししてくれる。彼女は短めのショートカットで少年っぽい感じの子だった。私はシャンプーの宣伝よろしく、さらさらにケアしたロングヘア。その頭背中の半分くらいまで伸ばしていた。そりゃ、TVタレントと比較したら相手にならないだろう。でも……それなりに魅力はあるんじゃないかなあと思っていた。

「でもどうしたら、いいのかしら?」

そうはいっても、何だか自信がない。夏休み前には、合コンで知り合った先輩に玉碎している。なんと彼女がいるのに頭数あわせで参加しただけだったんだそう。落ち着

いた物腰で、ガツガツしているところがなくオトナだと思っていたら、とんだ茶番だったってわけ。

「まずは、じゃんじゃん連絡をいれることかしら」

彼はバイトや何やらでなかなか捕まらない。それでも三回に一回ぐらいはどうか連絡がついて、他愛のない話をした。

数ヶ月の間に、何度電話したことだろう。東京と名古屋は思ったよりも遠くて、会いに行くのは無理だった。パスケースに入れていた写真が段々色あせていく。私の悪いところは飽きっぽいところかもしれない。

「何だか、脈ないなあ」

とうとうある日、杏奈ちゃんに弱音を吐いた。彼女はちよつと困った顔をした。

「あの……千夏」

彼女はとても言いづらそうにバッグの肩ひもを弄ぶ。もてあそ

「実は、この前の日曜日に彼と会ったの」

「——え？」

私はあまりにびっくりして、そう聞き返していた。

「急に、こっちに来る用事ができたんだって。みんなに連絡したけど、私しか捕まらなかったって言うの。あんまり可哀想だったから、飲みに行っただけど。今度はみんな

で、つて言っていたよ？」

「そう」

ああ、日曜日は親戚の法事だった。連絡くれてても出られなかったしな。本当に間が悪いなあ。そのときはそう考えた。

そのまま、忙しさにかまけていつの間にか彼のことを忘れていて。やがて本格的な就職活動の時期になった。うちの短大は結構縁故が強くて、この不況下でも色々とコネがさく。だから私たちはリクルートスーツを着て、あっちこっちに先輩訪問をする。自分のことに夢中だったから、一番近くにいたはずの杏奈ちゃんことも忘れていた。

ある日、何かがきっかけでふと杏奈ちゃんの就職はどうなったかなと思つた。卒論の研究室が違うこともあって、その頃にはお互いあんまり顔を合わせることもなくなっていた。共通の友達に聞いてみる。そして、とんでもないことを聞いてしまった。

「杏奈、卒業と同時に結婚するんだって。名古屋に行くから、就職はしないって」

思わず、我が耳を疑った。どういうこと？ 名古屋って、まさか——

「ごめんね、千夏」

席に着くなり、泣き出しそうな声で彼女は詫びてきた。

「私も、彼のこと好きだったの。だから電話がかかってきて、何度か会って付き合おう

って言われたとき顔いちゃった。そりゃ、千夏のは気になったけど、あなたはいつの間にか彼のことを口にしなくなっていたから。もしも、千夏がずっと彼のことを好きなら、私は身を引いてもいいと思っていたのよ」

「ふうん、そうなんだ」

私は気がなさそうに答えた。

「早く、言ってくれたら良かったのに。何をそんなに心配しているの、こっちは全然気にしてないわよ」

私の言葉に杏奈ちゃんはホッとして表情を崩した。

「良かったあ、千夏のことはずっと気になっていたの。言えなくて、ごめんね」

その日の帰り道、駅で杏奈ちゃんと別れてホームに上がる。通過電車が強い風を伴って通り過ぎたとき、私の涙腺が緩んだ。ふらふらとそのままベンチに腰かけて俯く。あとからあとから涙が溢れてきた。

彼は、私を選んでくれなかった。どうしてなんだろう。

杏奈ちゃんと較べて、ルックスだってスタイルだって負けてないと思う。じゃあ、性格？ 私のどこが悪いの？ どうして私はいつも好きになった人に振り向いてもらえないの？

悔しい、どうしてなんだろう。本当にどうしたらいいのかわからない。

そんなことの繰り返しだった。

だから、この前（といっても六年前）、永峰さんに振られたときも悲しかったし、シヨックだったけど……心のどこかで「ああ、やっぱり」と妙に納得していた気もする。

でも同じ受付の友達はどうぞん彼氏持ちになっていく。同じように親しくなって、同じように告げて——どうして私だけが駄目なのだろう。合コンに行っても、期待するような出会いはない。友人たちの愚痴の聞き役に徹しながら、実はいつも悲しい気持ちでいっぱいだった。

4

「——千夏？」

ぱちっと、どこかが弾けた気がした。ハツとして、起きあがる。照明の眩しさに眼が慣れなくて、視界がなかなかはつきりしない。

「あれ、榎原くん。帰ってきていたの？」

私は寝室にいた。シングルベッドの片っぱにうつぶせになって、いつの間にか寝入っていたみたい。目をこすってあたりを見渡すと、もうすっかり夜になっていた。ああ大

変つ、口元によだれが。

「あれ、珍しい。寝てるんだ、ふたりとも」

榎原くんの声を聞いて、自分が今どうしてこんな場所にいたのかをようやく思い出す。そうか、今日は幼稚園バスから降りた菜花ちゃんにせがまれてそのまま公園に行ったんだっけ。この寒空の下、ふたりとも驚くほど元気で、あちらこちらに走り回ったり遊具を楽しんだり。私の方も他に親子連れがいなかったことにホッとして、思いきり遊ばせてしまった。

その後、家に戻ると菜花ちゃんも梨花ちゃんも手が付けられないほどぐずって、だくだ眠そうだなーってそのまま寝かしつけてみたのね。そして、自分まで一緒に眠りかけていたらしい。

だからあんな夢を見ていたのかなあ、私。昔の古傷を次から次へとえぐり出すような、後味の悪さが今も生々しく残っている。時計を見ると、七時半。

「夕食、どうしようか。ふたりだけなら、店屋物でも取る？」

呆けた頭に榎原くんの声が割り込んでくる。でも私はまだ、さっきの夢の中にいた。

「ねえ、榎原くん？」

そして、思わず呼びかけてしまう。それくらい、心が不安定になっているみたい。

「うん？」

ネクタイを緩めながらゆっくりこちらを振り返る。私はその顔をまじまじと見つめた。「ひとつ聞いてもいい？ ああ、私たちって……どうして結婚したの？」

そう。それは私が六年後の世界で目覚めてからの二日間、ずっと謎に思っていたことだった。好いた相手には好かれず、悲しいくらい男っ気のなかった人生。最後には告げて振られることが当たり前みたいになっちゃって。

それなのに今、こんな風に当たり前に主婦していることが信じられない。可愛い子供たちに、家事育児に協力的な、しかも仕事も完璧にこなす旦那様。こんなので、あまりに話ができすぎていて居心地が悪い。

榎原くんは向き直ったその姿勢のままにっこりと微笑むと、あっさりと言った。

「そりゃ、決まっているだろう？ 千夏が結婚して欲しいって泣いて頼むから……」

言いかけた言葉がそこで途切れる。彼はハッとして私を見た。

「そうなの」

そのまま、顔から勢いよく布団に倒れ込んだ。すごく、惨めな気分。そんなことだろうとは思っていたけど、はっきり言われるとやっぱり情けないものがある。

「あ、……あ。ちよつと待て？ 今の冗談だって、嘘だよ、嘘っ！」

慌てたスリッパの音が、近づいてくる。でも、顔なんて上げられないわ、きっと今の私は最悪の表情になっていると思うもの。

「千夏、ごめん。悪ふざけが過ぎた、信じてくれよ」
 困り果てた声が慰めてくれるけど……ううん、きつと最初の言葉こそが真実なんだろ
 う。人のいい榎原くんが私の我が儘を聞いてくれたのか。これって、すごく嫌な女だ。

「ちーなーっー」

「……きゃうっー！」

うわっ、やめて！ いきなり耳元に息を吹きかけないでよ。慌てて跳ね起きて、左耳
 を押さえて後ずさり。安全な間隔をキープしてから、榎原くんを睨む。でも、笑ってい
 るんだよね、彼。そして、とろけそうに優しい顔でこう言った。

「ごめん、ごめん。本当に忘れてるんだよな、悪い冗談だった、……本当のところはね」
 そして、音もなく私のいる壁際まで寄ってきて、おもむろに片膝を付く。腰を落として
 猫背になった榎原くんと、私の目の高さが同じになった。ええと、上手く言えないけ
 ど西洋の騎士がするようなポーズ。

「千夏」

彼は真面目な顔で私をじつと見る。思いきりかかるんですけど、息。背中には壁が迫
 っていて、これ以上は下がれない。

「結婚してくれ、俺と。君がいないと生きていけない……頼む」

そこまで言って、ふっと表情を崩した。背筋も伸ばして、ふたりの間にいくらかの空

間が形成される。

「——って、頼んだの。もちろん、俺が」

私は大きく目を見開いたまま、彼の顔を穴が開くほど見つめる。

「嘘」

何よ、それ。思わず叫んじゃった自分が悲しすぎるわ。榎原くんの表情に真実を探ろ
 うとしたけど、当の本人は私の受け答えに不服そうにむくれている。そのうちに、ふい
 と横を向いてしまう。

「嘘で言えるかよ、こんなこと。マジで恥ずかしいよ、こんなときに古傷をさらさせな
 いでくれよな？」

怒ってるのかな、それとも拗^すねてるのかな。うーん、どっちなんだろう。

「それって、本当なの？」

どうしよう、思考回路がちがちに固まってちつとも働かない。どんな顔をしたらい
 いのか、頬の筋肉を動かすこともできないでいる。

「ああ、千夏があんまり可愛いから。愛が溢れちゃったんだな」

きゃああつ、どうしたのよ！ いきなり、私の右手をさつと取って指先にキスするし。
 「ななな、何するのっ」

やば、不覚。そのまま、ぎゅっと手を握られてしまった。これじゃ、に、逃げられないっ。

立ち読みサンプル はここまで